

うちの客の勘違い度合がもう手遅れレベルなんじゃが?

セイハラン星人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

プリキュアと全く関係のない力を渡され転生した主人公は、その力を使い人々の希望のため戦う決意をしたのだが??

なんやかんやあり喫茶店の店長となっていた。

この物語は、シャレにならないレベルの勘違いをされた敵勢力の悩みや愚痴を聞きながら、どうにか丸く収まる展開にならないかと奮闘する店長たちの物語である。

目 次

王道バトルストーリーを書こうと思った結果がこれだよ（レイプ目）
1

聞こえるかプリキュア！俺は宇宙人だ！人と同じ形の宇宙人だ！※
1

本編とは一切の関係はありません
4

小説書いていつも思うことは出だしの文章をどうするかつてことな
んだよね
7

『投稿してくれ！』『嫌です、こんな作者も予期していない展開のもの
を！』『流石にスタプリ最終回が終わってまだ投稿せん事にはいかん
のだ！』
10
7
4

王道バトルストーリーを書こうと思つた結果がこれだよ（レイプ目）

希望ヶ花商店街の裏路地には、たつた一軒だけ喫茶店が営業している。人の目につきにくく、希望ヶ花市の住民達でも知らぬ人が多く、訪れる客はだいたい決まっている。

店の名前は『アンダンテ』

どうやら今日も、悩みの種を抱えたお客様がやつてきたようだ。

「いやいや、やつてきたようだじゃなくてね？」

特にこれといって言うこともない服を着ていながら、シャレのつもりか襟を立て肩にパチモンのゆるキャラを付けているところに妙にイラつと来る、それでいて某ポケットなモンスターに出て来るボスのような男がなにやら言つているがどうでもいい、名前は確かビューンとか言つた気がする」

「長々と語つたと思つたらほほデイスられただけなんだけど聞こえたからね？あと僕の名前は『デユーンだよ』

「失礼ヒイロさん」

「僕はそんな事ある」と自爆するような名前ではないし何度も言うけどデユーンだよ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「噛み死ねば？」

「せめて隠そうその殺意！」

「隠せるわけがないだろうが、何を言つているんだこの男は？今日の客がデユーンというだけでやる気が消えていく??」

「で、ご注文は」

「コーヒーを一つ」

「かしこまりました、インスタントですね」

「なんですか？」

コーヒーを作りながらデューンを見る、相も変わらず疲れた顔をしているが、自業自得なのでどうしようもない。

「はい、コーヒー」

「ありがとう？ん、美味しい、ちゃんと淹れてくれてるじゃないか」

「それマ〇シム」

「oh？」

「それで、どうなのさ」

「?? 何がだい」

「誤解」

毎度同じことを聞くが、そのたびに冷や汗を流して目をさまよわせている。変わらないとこを見ると今回もお察しのようだ。

「はあ？」

「もう無理なんじやないかと思えてきたよ??」

真っ白に燃え尽きたこのデューンは、砂漠の使徒という組織の頭領なのだが、はるか昔に母星を失なつた流浪の民であり、第二の故郷を求める地球上に訪れた、ようは宇宙人である。

地球上に移住しようと降り立つたまではよかつたのだが、ここで地球が砂漠の使徒を侵略者と判断しプリキュアを生み出した。悲しいね。初めは直ぐに解けるだろうと思われた誤解も気づけば4世紀も経過、良くも悪くもプリキュアに選ばれた者は真っすぐな性格が多いようだとデューンは語っている。

4世紀も誤解されていることを笑えばいいのか、誤解が解けないと悲しめばいいのか分からぬが、チャンスがなかつたわけでもない、先代のプリキュアであるキュアフラワーが稀にみる話の分かるプリキュアであつたからだ。

これには砂漠の使徒も大歓喜である。

しかし、ここでデューンのストレスがまさかの大噴火である。馬鹿野郎。

4世紀の間に溜まつたストレスが金輪際ないかもしれない千載一遇チャンスであつたにも関わらず爆発させてしまい、砂漠の使徒も意氣消沈である。

特にサラマンダー男爵が酷く、ボスナツキー曰くFXで有り金全部溶かした様な顔だったそうだ。

こうして振り返ると酷いもんだな??

「だが新しいプリキュアが出たんだろう、そいつは駄目なのか？」

「まだ報告でしか見てないんだけどね、冷静な子ではあるようなんだけど??」

「嫌な予感しかしない」

「サバーク博士の娘さんらしいんだよね」

ゆりちゃんがつたかー

「いや、むしろ解きやすいんじゃね？サバーク博士が説明したら一発でしょうに」

「それが、さ」

「なに」

「実は誤解を解こうと行つてもらつたんだけど、娘が真剣に立ち向かおうとする姿を見てたら自分の知らないところで成長していたんだなと思つたらしくてね」

「ん？」

「誤解を解くことなく悪役ムーブに徹してしまつたそんなんだよね

「」 ??

サバークエ??

聞こえるかプリキュア！俺は宇宙人だ！人と同じ形の宇宙人だ！※本編とは一切の関係はありません

基本的に客が少ないアンダントでは一人でいることが多いため、営業準備が終了した後は趣味興じるかニュースを見るぐらいしかやることがない。しかし、最近のニュースは芸能人の不祥事などが多く、朝から気分が悪くなるのが悩みどころだ？

コーヒーを飲みながらニュースを見ていると遠くのほうから爆発音が聞こえてきた。

「?」

これでいつたい何度もかと、どうでもいいことを考えながら救急箱の準備をする。しばらくすると、店に一人の女性が入ってきた。

「お邪魔するわ」

「今日はさつちゃんか」

「さつちゃんって呼ぶんじゃないわよ！」

相変らず声がでかくてやつかましいなこの人？

「あたしにはサソリーナって名前があんのよ、サ・ソ・リー・ナ!!」

「やつたね！さつちゃん！」

「だからやめろってんのよ!?」

「はいはい、とつとと座つてくださいよ消毒するんで」

なにやらまだ言いたい事がありそしだが、長くなりそうだったので無理やり座らせる。

「痛つつ」

「ほら、動かない」

毎度毎度よく怪我をするもんだ、『本気で戦えば』結果は違うのだろうに??

「年下を傷つける趣味なんてないわよ、それに本気で戦ったわよ？全然ではないけど」

「まつたく？」

なんだかんだ、こいつらのこういったところは嫌いじゃない、そのせいでどうしても甘くなってしまうのが、自分でも駄目だなと思う。

「しかし、なあ」

「なによ」

「怪我するたびに店に来なくとも惑星城で治療したほうが早いだろうに」

「このまま帰るとあの2人が煩いのよ??」

相変らず仲がよろしいことで、それをいつたらまた面倒なことになるので黙つておくことにしよう。

「はい、おしまい」

「ありがとう」

「何か食うか」

「カレー。ピラフって出来るかしら」

「ちよい待ち」

頼まれたカレー。ピラフの調理を始める。少しオリジナリティはあるが、特別美味しいものでもないのだがね。

「気になつたんだが?」

「なによ?」

「どのくらいの強さだった」

「あなたも大概よね」

「定期的に抜かないと溜まるだけだ」

「?? うわあ

「貴様ア！」

分かつたうえでからいやがつて、ほつといたら『溢れて暴発する』から発散させなきやならないと言ったはず??その心噛つているな!!

「怒んないの、でもそうねえ??今はまだ私たちのほうが強いだろうけど、そう遠くないうちに抜かれるでしょうね」

「随分と高評価じやないか」

「正当な評価よ、だつて彼女センスがいいもの」

「ゆりちゃんが、ねえ」

人は見た目だけじゃ分からぬものだな。

「彼女のセンスとプリキュアとしての力がうまい具合に噛み合つて、今までのプリキュアの中でも群を抜いて強いわ」

「プリキュアの力、地球のバツクアップつてなかなかインチキだな」

「あんたが言つても説得力皆無なのよね?」

「その呆れた顔をやめろ、カレー。ピラフ俺が食うぞ」

「出来たのならすぐ出しなさいよ!?

適当に返事をして対応しながら、横に置いた調味料たちを見て笑みが零れる。

「グフオツ!?!?」

食つたな

「あ、あんたこ r オ” ツフ!? 何入れたの!?」

「デスソース」

「どち狂つてんのかい!!」

「馬鹿を言うな、カレー。ピラフは頼まれたら作るが、そもそもメニューにはない裏メニューであり、俺好みアレンジが加えただけだ。つまり、ろくに内容を確認しなかつた貴様の落ち度というわけだ」

「それが店主のやることかい!!」

「店主だから! やるんだろ!」

自分で言つといてなんだがその理屈はおかしいな。

小説書いていつも思うことは出だしの文章をどうするかってことなんだよね

アンダンテには二つの顔があり、一つは喫茶店、そしてもう一つは居酒屋である。店内の装飾から見るとBarと言われたほうがしつくりくるが、そこまで気取った酒を置いてあるわけでもなく、つまりや酒の内容が居酒屋向きであつたため居酒屋を名乗っているだけの大した意味などない。

まあ、明らかに後付けな設定のように見えるがそんなことはない。だつたら何故一話で説明しなかつたと君たちは言うかもしれないが、そんなことはどうでもいいのだ。別に昨日作者が同僚と飲みに行きそこで思いついたとかじゃないから。いいね？

「キミ、さつきから誰に向かって話してるんだい？梅サワーよろしく」「どうでもいいじやき、それより俺の角ハイはよ持つてくるぜよ」「はいはい」

なにかいけない電波を受信したような気がする、よくもづけづけど人の心の中に入る。恥を知れ！

「コブラージャ、お前はいつもいつもサワーばかり、そいつは逃げじやと言うたぜよ」

「キミ、そなんだいクモジヤキー？日本かぶれのくせにハイボールしか飲まないじやないか、そこは日本酒を飲むべきだらうキャララぐらい守つたらどうだい？」

「ほう、コブラー？ブラジャーのわりには強気な発言じやき」

「わざとだね、わざとだろその言い直し」

「分かっているなら言わなくともいいぜよ」

「人を馬鹿にしたその態度、気に入らないね」

「やるか？」

「やるかい？」

「そこまでにしておけよ」

「??」

なにうちで暴れようとしてんだこいつら、傷一つでも付けたらマジ
許さんからな？」

「爪と肉の間に針ぶち込んでやる（角ハイと梅サワーおまちどう）」「こいつ笑顔でなんてえげつないこと考えておるじやきツ！」

「逆、逆だから心の声!!」

「やかましい、喧嘩なら帰つてからしやがれ馬鹿野郎」

「ま、マジだ、本気と書いてマジと読む感じのマジだ！」

「クモジヤキーイヤラ！ キヤラ忘れてる!!」

「じやき!!」

「落ち着けって？」

酒が入ると多少なりと変わるもんだが少し落ち着きなさいつて、もうなんか色々酷いことになつてるから。

「そういうやさっちゃんはどうした？いつもトリオじやん」

「サソリーナなら今日は来ないよ」

「というより暫くはこれんぜよ」

「どつか行つてんの？」

「今頃ダークプリキュアと北海道でカニでも食つてるぜよ」「有給使つて一週間旅行を楽しんでくるつてさ」

「砂漠の使途に有給とかあんのか？」

株式会社砂漠の使途つてか、シユールすぎるだろ??

「それ絶対サバーカ博士ついてこうとしただろ」

「あー、したね」

「したぜよ」

「行けなかつたのが口ぶりから分かるな」

「女性限定で行こうつて話ではあつたんだけどね」

「あの時のサバーカ博士は見ていたれなかつたぜよ?」

「あ、これ絶対ろくでもないことだ私知つてる。」

「サバーカ博士がついていくつていつたら、『もう姉さんと戦いたくな

かつたのに、せつかくこれで最後だつて思つたのに！それなのに！父さんなんて嫌いだ、ついてこなくていい!!』って大声で叫んでね「惑星城全体に響くような声だつたぜよ」

「うわあ？」

「人が壊れるつてのがどういう事か、実感したよ」

『さ、サバード博士？』

『大きな星が点いたり消えたりしている??』

『はあ？』

『アハハ、大きい？彗星だろうか？』

『ちよ、ちよつと博士』

『いや、違う、違うな。彗星はもつとバーつて動くものな』

『誰かデューン様を読んできて！』

『暑つ苦しいなこのマスク、む、外せないのか？おーい、外してくださいよ、ねえ』

「いや、おまそれ？」

「僕たちとしても思うところがなかつたわけじゃないけど？」

「アレを見たら何も言えんじやき？」

「今どうしてるんだ」

『デューン様とサラマンダー伯爵のメンタルケアで回復はしてるぜよ』

「まだ完治はしていないけどね」

この場合は精神崩壊から回復できたサバード博士が凄いのか、デューンとサラマンダーが凄いのか分らんな。

「まあ、でもよ」

「うん」

「おう」

「結局はサバード博士の自業自得なんだよな、これ」

「それな」

『投稿してくれ!』『嫌です、こんな作者も予期していない展開のものを!』『流石にスタプリ最終回が終わつてまだ投稿せん事にはいかんのだ!』

普段ならば、その場所には多くの人々が訪れ、蝶が飛び交い、風が吹けば花弁は粉雪となり多く者を魅了する花畠である。しかし、人影は一切なく、虫達は逃げだし、花は枯れ果て朽ちている、そこに美しさなどなく、ただただ絶望が広がつていてるだけ?

その中を高速で駆け抜け、幾度となく衝突を繰り返す者たちがいる。

「遅い」

迫りくる蹴りを躱しながら、仮面の男はどこか呆れたような声色で呟いた。

「クツ?」

白百合の戦士は全力での攻撃を軽く躱されている現状と、仮面の男との間にある絶対的な技量の差に歯噛みする。

「以前戦つた時から多少は成長したようだが」

「なにを!!」

「攻撃が正確過ぎるが故に読みやすい、そして?」

目の前にいた仮面の男が突然背後に現れ判断が一瞬遅れる

「しまつ!!」

「とつきの判断が鈍い」

手の平から溢れ出るエネルギーの塊を直接押し当て、解き放つ

「グウ、きやああ!!」

鳴り響く轟音と、地面を抉り取る爆発がその凄まじさを物語り、ゼロ距離で被弾した白百合の戦士は空へ投げ飛ばされた。

「ムーンライト!!」

戦闘の邪魔にならぬよう、後方に隠れていた精霊が白百合の戦士の名を叫び、仮面の男に構うことなく駆け出した。

「ムーライト、ムーンライト!!」

「ごめんなさい、コロン？でもまだ」

「逃げるよムーンライト、今の僕達じゃサバード博士には」

「嫌よ」

「サバード博士との力の差は明らかだ！君のそれは勇気じゃない、ただの蛮勇だよ！」

「つ？それでもよ」

「ムーンライト!!」

相棒である精霊のコロンは言葉を否定しない。分かっているからだ、戦つてそれを実感したからだ。今の私では逆立ちしたつて彼には、サバード博士には勝てない？これで二度目、サバード博士が言ったように前回より成長した、だから挑んだ！厳しい戦いになるのが分かつていても、そこに確かな勝算があると確信できた！

なのに、また負けてしまう？？でもね

「いい、コロン？私はプリキュアなのよ、ここで退いたら誰が戦うとうの？」

「それは？」

「いないのよ、誰も？だから二度と、プリキュアが退いてはいけないの」

思わず笑いそうになる強がりね？でも、こうでも言わないと足が震えて、立っていることすらままなくなりそうなのよ？

「茶番は済んだか？」

「つ？あら、待つてくれるなんて優しいのね」

「例え貴様が策を考えていたとして、結果は変わることはない」

瞬間、今までのものとは比べられないオーラが発せられた。抑えたはずの震えが蘇り、冷や汗が流れるを感じる？？

「さて、作業開始だ」

▼▼▼▼

「なあにが『作業開始だ』だ」

「ぶべらつ!!」

「あんたマジで何がしたいんだよ、プリキュアがゆりちゃんだつて分かつた時に説明すりやすぐに終わつて万々歳だつたろうが、なに悪役ムーブに徹しつてんだよ。しかも割とシャレにならないレベルの悪役じやねーか、ゆりちゃん怯えてんじやねーか、軽くトラウマになつてんじやねーか！そこまで徹底して演じなくてもいいだろうが、てかなんでそこまでできんだよ、おかしいだろ！おかしいよな？おかしいんだよ!!」

「まそつぶ!?」

拳のラツシユでここまで殴つたのは初めてだ、あースツッキリしない。

「ぐ、ぐむ?! いつたん、いつたん落ち着いてくれ!!」

「あ” “あ”？」

「私とてゆりと戦うことは本望ではない、ないが?」

「いや言はなくていいから」

「なんだ敗北をしても諦めずに立ち向かおうとするその姿を見たら、

悪を演じるしかないではないか!!」

「言はなくていいと言つた！」

「なんでこう歪んじまつてんだろうなこいつの思考回路は??

「いい加減にそのバカな思考はやめろ」

「ば、ばか？」

「小百合ちゃんのことも考えてみろよ」

「さゆ? ダークプリキュアのことだと?」

「いちいち言い直すなや、あと思い出したかのように急にキャラを戻しても違和感しかないんだよ

「クモジヤキー達から話は聞いてんだ、そりや小百合ちゃんも愛想尽

かすは

「そ、そこまででは「そこまでだよ!」グツホア!?」

「小百合ちゃん本来なら今頃高校生だぞ、いくらサラマンダー男爵やデューンが教育しているから大丈夫だと、そういう問題じやないだろうが! 普通に高校生して友達作って遊んだり勉強したいとかそういうごくごく当たり前の欲求だつてあんだぞ!!」

「あ、はい…スマセン」

「あの子なあ、この前喫茶店に来て二人から出された宿題を一人でやつてたもんだからコーヒーでもサービスしようとしたらよう…』『この問題、前もやつたような…』

『ああ、そこはこの公式を使つてだな…』

『そういえばそうだつた、ありがとう』

『なに、気にするな私とお前の仲じやないか』

『ば、ばかもの! 恥ずかしいではないか…』

『ほう、ダークプリキュアにも友人が出来たのか、実にいいことだ。それを教えてくれなかつたことが悲しいが…』

『サバーク博士、よく俺の言葉を思い出してみろよ』

『何かあつたか…』

「小百合ちゃんは、『二人から出された宿題を一人でやつてた』と、俺は言つた筈だ……つまり

「つ、つまり」

『あまりストレスから小百合ちゃんはな、頭の中だけにいる『脳内フレンズ』生み出してしまつたんだ……』

「…」

「…」

「…」

「…」

「すまん、ちょっと誤解解いてくる。」

「そうしな」